

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18720003  
 研究課題名 (和文) ベルクソン哲学におけるスピリチュアリズムと現象学的身体論の統合可能性の研究  
 研究課題名 (英文) The possibility of integration of spiritualism and phenomenological body theory in Bergson's philosophy  
 研究代表者  
 小関 彩子 (OZEKI AYAKO)  
 和歌山大学・教育学部・准教授  
 研究者番号：10379604

## 研究成果の概要：

我々人間存在にとっての自己が、個的なものであるとともに自己を取り巻く環境へと開かれたものであることを、自我と身体の両面から明らかにした。ベルクソンの自我論と身体論を検証することによって、個人の自我と、自我を超越する普遍的かつ宇宙的な生の流れを「大文字の自我」と「小文字の自我」と名づけ、さらにベルクソンが指摘する「大身体」を、「小身体」の持つ機能ではなく、宇宙へと拡がる身体そのものの拡大として位置づけた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,500,000	0	1,500,000
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	180,000	3,180,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 西洋哲学において伝統的な主観・客観の対立図式の乗り越え

哲学の伝統において、長い間主観が自己自身の主体性を保持することと、そのような主観が自己を超越した客観的対象を認識しうることとの矛盾をいかにして解明するのか、が大きな問題とされてきた。ベルクソンは、対象を主観の観念に内在させる観念論と、対象を主観から断絶したところに措定する実

在論と、対立する二つの立場が共通して前提としている図式そのものを批判し、あくまでも我々が日常生きているこの現実の生活世界において与えられる具体的な事象そのものを理解しようとする、革新的な方法を提示した。

## (2) 従来のベルクソン研究における自我と身体的位置づけ

従来の研究史においては、「奥底の自我」と「表層の自我」というベルクソンの有名な

分類にもとづいて、彼の自我論を他者との共通性に解消されない自我の根底に重点を置いて解釈するのが一般的であった。またベルクソンにおける身体は、個我がその自己性を失い、自己以外のものとの共通性に解消される、表層的で非本質的な位置に置かれることが通常であった。

### (3) フランス・スピリチュアリズムと現象学

ベルクソン研究には大きな二つの潮流が存在する。一つは、彼を唯心論の伝統の中に位置づけて、物質に対する精神の優位性を強調する方法である。19世紀末のフランスが科学技術の発達に伴って、物質文明を謳歌していることに対する、反科学主義・反知性主義の旗手として、ベルクソンを理解するのである。

もうひとつは、現象学の源泉の一人として、ベルクソンの方法論を応用する方法である。物質世界の諸事象が人間存在に対してどのように与えられ、現われ出で、我々がそれに対していかに関係するのか、その過程を詳述するベルクソンの記述に彼の本質を見るものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、このようなベルクソン研究の通念に対し、我々人間存在が自己自身でありつつもなお他者や世界を認識し、相互行為しうることを、自我と身体の両面から明らかにすることにある。

従来のベルクソンの自我論の研究史においては、自我の外にあるいかなるものとも区別された独自性が強調されてきた。しかし我々は、ベルクソン哲学に胚胎する普遍性・世界性を検証しなおさなければならない。なぜならば、ベルクソンの自我の深奥を探る試みは、そのまま、未だ個我の未分化な生の流れへと遡行していく。だが生の根源の称揚は、必然的に個別性との間に相克をもたらす。また社会内部で社会と相互関係する自我は、当該の社会に支配的な集合心性の影響下で、それ自身社会化されているとベルクソンは考えている。ここから、社会化された自我と個人の自己性という問題が浮上する。自己が自己性を喪失せず、しかも社会や世界をいかにして認識し、相互行為することができるのか。これが本研究のテーマである。

この課題を解明するために、本研究はベルクソン解釈におけるフランス・スピリチュアリズムと現象学の二つの潮流を統一的に理解することを目的とする。ベルクソニズムは、この二つのいずれにおいても全面的に包摂されるものではない。このことが、双方からのベルクソン批判を生むことにもなった。心身二元論に立脚して精神を物質よりも優位

に置く、伝統的なスピリチュアリズムとの比較において見れば、ベルクソンは物質に大きな比重を置く。特に身体という特権的な物質の評価は、唯心論からは出てこないものである。反対に、現象学の立場からは、自我の内面性に引きこもるのではない、世界への開けと言う側面が不足していると指摘されている。

しかし、本研究は、ベルクソンの思想そのものには、決してそのような矛盾する二面性が胚胎してはいないことを明らかにする。本研究は、自己の限界を打破する継起を、むしろスピリチュアリズムに依拠して解明する。これに対して、現象学からは、「私に現われ出でたもの」のみを考察の対象として、超越的な物的対象を自明のものとし、という態度をあえて導入する。これによって、両者のアプローチを統合することを目指すものである。

## 3. 研究の方法

### (1) 大文字の自我と小文字の自我

純粹持続する我々の生を内側から直観しようとするベルクソン哲学は、スピリチュアリズムの伝統に多くを負っている。本研究は、まず実存する個人の自我と、その中に胚胎されつつも自我を超越する普遍的かつ宇宙的な生の流れとの関係を、唯心論の観点から探求する。本研究では、この二つの自我を、「小文字の自我」と自我を超える「大文字の自我」と名づけて、その特徴を明確にした。生命の流れのうちにあつて、個人に「私」性を付与しているのが身体である。それゆえ、身体という制約を離れた個人の自我は、大文字の自我のうちに溶融する。

しかしそれは、決して彼岸へと飛翔するだけの存在ではない。この二つの自我の存在様態を統一的に理解するためには、宗教をフィールドにすることが有効である。『道徳と宗教の二源泉』は宗教論であるとともに社会論でもある。宗教という営みの本質は、自己の内面に沈潜しつつ、かつ自己を超越したものへと憧れ出でることにある。それはまた、きわめて個人的な営為であるとともに、社会的な集合表象に基盤を置くものでもある。このような宗教に関するベルクソンの研究を、神秘主義や社会学など、形而上学とは異なつた分野の知見とも比較しつつ検証した。

とくに、開かれた宗教において可能となる「愛と行為」の関係に着目した。普遍的な生の根源から流出した愛が、個人の実存へと分有され、そこにおいて現実のものとなり、さらに世界へと、愛の行為として拡大していく構造を解明した。

これらの研究のために、『道徳と宗教の二源泉』を巡るワークショップに参加するなど、

各地の研究者と情報交換し、ベルクソンの宗教論が持つ独自性を明らかにした。また、恣意的で独善的な価値観に固執するのではなく、特定の社会集団の共同性に安住して、他の社会集団を排除するのでもない、真に個人的かつ普遍的な「愛」を実現する可能性を探求するために、ベルクソンが挙げているキリスト教神秘主義の事例を調査した。特にスペイン神秘主義の観想会の思想や、フランス神秘主義の特異な例であるジャンヌ・ダルクの事跡を、当時の時代背景や社会状況とも関連付けつつ調査した。

## (2) 大身体と小身体

以上のように、生の深奥から溢れ出た愛が必然的に行為の世界へと拡大していく過程をたどると、ベルクソンが唯心論の領域を超えていく段階に至ったことが理解できる。観想会の神秘主義者たちが、最も精神的な高みを目指しつつ、同時に偉大な行動の人でもあったことから理解されるように、超越的始原は個我の内に分有され、そこから愛の行為として流出し、世界へと働きかける。自我の開けは同時に世界性への開けを伴う。それを可能にするのが身体なのである。

それゆえ、本研究を遂行するためには、身体というメディア、媒介者のありかたを分析しなければならない。身体とは、世界と直面し、常に自己性と社会性とを同時に帯びざるを得ない両義的な存在だからである。

ここで、ベルクソン研究の潮流の一つ、現象学との架橋がテーマとなる。身体・肉・精神という問題を、具体的に生活世界の中で展開してきた現象学の観点を導入することが、有効なのである。そこで鍵概念となるのが「小身体」と「大身体」である。小身体とは狭義の身体、我々個人の身体であり、大身体とは世界そのものである。

この特異な身体観が形成されるに至るまでには、ベルクソン哲学において知覚に関する大きな変遷が見られることを本研究は明らかにした。1911年の「魂と身体」においては、身体自身は小身体にとどまるが、身体とは区別された知覚機能によって、「私」「自我」は宇宙へまでも広がるのが可能だと考えられている。しかし1932年の『二源泉』に至っては、身体そのものが知覚によって拡大する、さらに言えば、知覚であるところの身体自身が「小身体」を超えた「大身体」として拡大するのである。

ベルクソンの「大身体」は、知覚という形で我々のいわゆる狭義の身体から溢れ出て行くもの、すなわち我々を取り巻き、我々に与えられている環境のことでもあり、またそのような環境の中にある我々の身体のことでもある。この両義的な身体を理解するため

には、メルロ＝ポンティの「肉」の存在論と大身体に関連に着目することが方法として有効である。肉とは、触れるものと触られるもの、身体と世界の双方を統一的に把握するものであるが、しかし身体を世界に溶解させる一方で、主客観を裂開させるものでもある。従来の自己と他者の区別とは異なった間主観性、間身体性の視点から、あらためてベルクソン哲学の小身体と、それを越えて広がる大身体とを位置づけなおす。それによって、自己と自己を取り巻く環境との関係が、対立する二つの実在として対置されるべきものではなく、より繊細に交錯しているという現実を明らかにすることが出来る。身体と精神、自己と他者の境界線上にあるもの、そのような境界線を無意味にするものの存在への視野が開かれるのである。

## (3) 人格と宗教社会学

精神と身体を包含した人間存在を包括的に理解するためには、「私」という自己を人格という概念で捉えたと、問題を整理することが出来る。人格とは社会の中であって独自の存在である個人を可能にするものであるが、他者と共通した世界から一個の人格を切り出してくるものは身体である。このような個人と社会との関係の問題を、主に社会の観点から分析したのが、社会学、とくにベルクソンの同時代人であるデュルケムである。デュルケムが社会を科学的な因果関係によって説明することの出来る、静態的な実体として描くのに対して、ベルクソンはダイナミックな動的社会の可能性を提唱する。

本研究は、主なフィールドを宗教に求めたのであるが、宗教を社会の共同性との関係において分析する研究は、まずは社会学の世界において進められてきた。社会を単なる個人の集合体ではなく、それ自体として存在する実体であると考え、「もの」のように分析すべきであると提唱したデュルケムにおいては、人格も個々人間の差異を超越して、普遍的・一般的な人間性のうちに解消されてしまう。これに対して、ベルクソンは人類の普遍的道德、開かれた宗教を志向しながら、その基盤を個人の人格の上に置く。宗教を場として展開されるベルクソンとデュルケムの、人格についての思想に見られる共通性と差異性を比較・分析することによって、一定の閉ざされた構成員からなる現今の社会を、個人のほうへ、また逆に人類のほうへと超えていく視点の必要性が明らかになった。

この研究を進めるために、ベルクソンが晩年スイスの山荘を拠点に、ナショナリズムを超えた普遍的な人類愛を実現する場として世界連盟に寄せた期待と実践について、また、ベルクソンとデュルケムが生きた第3共和政の当時の世俗道德と宗教をめぐる社会情勢

について、調査を行った。

#### 4. 研究成果

従来のベルクソン哲学研究を特徴付ける二つの潮流、すなわちフランス・スピリチュアリズムと現象学を導入し、しかし従来とは全く逆の方向からこの二つの方法論を利用した。すなわち、純粹持続する我々の生を内側から直観しようとするスピリチュアリズムが、結果的に個我の限界を打破し生の超越的始原への開けをもたらす。また、世界が自己へと現れる過程を描出する現象学を身体論に適用し、普遍的な生の流れから個人の「私」性を析出する場として身体の役割を再評価した。これによって、従来様々な観点からなされてきたベルクソン哲学に対する解釈の多様性を、統合するべく通路が開かれた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

小関 彩子 (OZEKI AYAKO)  
和歌山大学・教育学部・准教授  
研究者番号：10379604

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：